

手間ひまかけた黒砂糖をどうぞ

黒潮町の特産品の一つである黒砂糖を使った商品が並ぶ「黒糖祭」が2月20日、道の駅「ピオスおおがた」で開催されました。同駅物産館の「ひなたや」などでつくる実行委員会の主催で、今年で3回目。



さとうきびの生搾りジュースの無料配布には行列ができていました。レモン汁をかけるとまた違った風味で味わえます。

会場となった駐車場では、昔ながらの釜炊き製法で作った黒砂糖入りのお菓子や料理がたくさん販売されました。定番のかりんとうをはじめ、果汁100%のさとうきび蜜、ミルクテイに「ぼか」としよがをブレンドした「チャイ」、黒砂糖で味付けした大根煮など、懐かしい味からこの日限定の新商品まで盛りだくさん。黒砂糖の使用方法を紹介するとともに黒潮町産黒砂糖をPRしました。

第11回感想画コンクール
受賞作品の紹介

大方および佐賀の両図書館では、絵本や本を見て・読んで・聞いてイメージして描いた絵画を募集する、「感想画コンクール」を毎年実施しています。

今年度は、町内外267人の方から287点もの応募があり、クジラ大賞（小学生未満の部、小学校各学年の部からそれぞれ1点ずつ）、イルカ賞（小学生未満の部から2点、小学校各学年の部からそれぞれ3点ずつ）、図書館長特別賞（1点）が選ばれました。2月27日に大方あかつき館で行われた表彰式には受賞者20人が参加し、一人ずつ表彰状と記念品を受け取りました。



受賞者の皆さん、おめでとうございます。どの作品も一生懸命描かれていて、皆さんの心が伝わってきます。

クジラ大賞



3年生の部
友永 杏慈くん

「ぞうがだんだんやせてしんでしまう悲しみにたえながらリンゴや水をやる場所が感じました」



2年生の部
大谷 宥有くん

「スープを食べているところがいいなと思いました」



1年生の部
柿内 穂さん

「おじいさんがねずみのあなにおどりながら入ったところがすきです」



小学生未満の部
上岡 航大くん

「うれしい気持ちで描いた。家族とくすのきだんちに住みたい」



6年生の部
森田きらりさん

「とも子とサダコがつるに乗って冒険をする場面がすきです」



5年生の部
土居雄太郎くん

「悟空がおしろうさんを思う心がとても伝わってきます」



4年生の部
市川 悠元くん

「ぼくはゆかのところをがんばってぬりました。色をこゆくしたり、うすくしたりして、くふうしてぬりました」

イルカ賞



- 小学生未満の部／もりしづきさん、岡田楓空くん
- 1年生の部／谷口王唯さん、山崎未怜さん、徳廣 蘭さん
- 3年生の部／板山太陽くん、入野永捺さん、池田一樹くん
- 5年生の部／曾根明香里さん、上岡ちひろさん、野村朋矢くん

- 2年生の部／曾根康太郎くん、牧野 楽くん、宮地 凜さん
- 4年生の部／敷地果琳さん、松田竜弥くん、浜田桃果さん
- 6年生の部／廣瀬睦季さん、打井花子さん、西美登くん

【図書館長特別賞】 林穂乃佳さん

忘れられない記憶を伝えたい

近い将来起こるとされる大地震に備え、入野小学校の4年生を対象に2月17日、防災教室が開かれました。



この日の教材は、紙芝居「阪神・淡路大震災 ～まーくんが伝えたいこと～」。パソコンに取り込み、モニターに映して観賞しました。

紙芝居は、淡路市にある「北淡震災記念公園」の副館長・米山正幸さんが、淡路市富島地区での被災体験をもとに作製したもので、震災で亡くなった小学生の男の子が、残された家族や友だちのことを天国から見守るといふ物語となっています。当時、地域の消防団に所属していた米山さんは、救済活動が続けるなかで、助け出すことができず亡くなってしまった子どもたちを何人も目にしました。震災から16年が経ち、「震災を知らない世代の子どもたちに命の大切さを伝えたい」と、およそ1年間かけて作ったとのこと。

【紙芝居の一場面】



命を大切に生きて夢を叶えてほしい。これからも空の上から見守っているからね。



目を開けてくれ正喜！僕は二度と目を開けることはありませんでした。



ゴ、ゴ、ゴードーン、グラグラ。ものすごい揺れでした。

紙芝居を見終わった児童らは、「地震が起こる前に必要なものをリュックに入れておく」「お父さんが休みの日に一緒に家具を固定しておく」など、自分がすべきことを次々と発表しました。防災教室を企画した役割防災担当職員は、「まずは自分の命は自分で守ることが大切です。家族や近所の人たちと協力して、今できることから備えてください」とアドバイスを送りしました。

学んだこと・実践してきたことを伝えよう

「広げよう 人権のわ」をテーマに人権意識の普及、高揚を図ることを目的とした「大方人権まつり」が2月19日、ふるさと総合センターおよび大方あかつき館で行われました。



ふるさと総合センターでは、デイサービス参加者や浜松解放子ども会などの催し、大方あかつき館では人権標語や絵画などの展示(2月16日～20日)がありました。

人権作文発表では、大方地域の小中学生4人が一人ずつ演台に立ち、これまで学習してきたことを発表。入野小学校4年村越仁君は、らっきょう作りの学習を通して「部落差別により畑を貸してもらえず、畑を作ることから始めたことを知った。手間がかかり大変だけど、今まで受け継いでくれたらっきょう栽培を大切にしていきたい」と大きな声で発表しました。また、同

小学校5年西岡研君は、危険で体にも負担がかかってしまう素潜り漁の聞き取り学習のなかで、部落の方から「いくら苦しくても危険な目にあっても、生活のために辞めるわけにはいかなかった」という話を聞かされ、「部落差別に負けず努力を重ねて多くの仕事を作り上げてきた」人々のくらしを学習。「学んだことをこれからの学習や生活に生かしていきたい」と力強く発表しました。



浜松解放子ども会高学年は、親たちの想いのこもった「重夢公園」ができるまでと元氣な歌声を聞かせる劇にして発表しました。

他にも、大方生華園による花の苗の販売や各団体の出店、しまむらかずおさんのコンサートもあり、たくさんの方々が差別から学んだことや実践してきたことを一人でも多くの方に伝えようと、まつりに参加しました。

見晴らしの良い山林へようこそ

町内の小学生を対象とした林間学校が2月24日、蜷川地区の山林(コトク山)で行われ、今回参加した佐賀小学校および入野小学校の5年生35人と教員らが、ヒノキの苗の植樹作業を体験しました。

森林は土壌に水を蓄え、山の崩壊を防止し、二酸化炭素を吸収して地球温暖化防止に役立つなどの大切な役割を担っており、その機能を十分に発揮させていくためには、健全な森林づくりが重要な課題といえます。そうしたことからこの林間学校は、全国一の森林率(84%)を誇る高知県で、これからの林業を理解し興味をもち、また関わってもらおうと、幡東森林組合が平成元年から行っている取り組みです。

作業を行ったのは、伴太郎集会所前から急な作業道を徒歩で3kmちかく登ったところにある、蜷川部落が所有する山の一角です。児童らは息をさらす大人たちを尻目に、元気に歌を歌いながら約30分かけて現場に到着。開校式では、佐賀小学校の小橋充幹君が「山林のことをたくさ

ん学びたいと思います」とあいさつし、休む間もなく作業に移りました。

急勾配のうえ、早朝からの雨で足場はぬかるんでおり大変な作業となりましたが、森林組合や蜷川部落の方々と協力して用意された200本の苗木を全て植えることができました。

指導した高知水源林整備事務所の職員によると、「今日植えた苗木が立派に成長するのは80年後。林業はすごく長いスパンの仕事で、孫のためにやっているようなもの」とのこと。作業を終えた入野小学校の秋田朱利君は、「この経験を生かして自然を大切にしたいと思います」と話してくれました。



植樹記念として桜の木を植えた明神遥己君(左)と小橋十真君(右)。中央は森林組合副組合長の金子米美さん。3年もすれば花を咲かせるそうです。

障がいのある方もない方も

さまざまなイベントやスポーツ活動をを通して、運動や健康への関心を高めてもらうことを目的に、「ユニバーサルフェスティバル2011 in 西部」が2月27日、土佐西南大規模公園体育館で行われました。

イベントを主催した「ユニバーサル四十」は、「障がいのある方が自分の住む地域で生涯スポーツを楽しめるようにする」「障がい者と健常者の交流活動を行う」ことなどを活動理念とする総合型のスポーツクラブで、昨年、高知県西部に設立しました。会場にはパラリンピックの正式種目にもなっている「車椅子ラグビー」や、手でペダルを漕いで進む「ハンドサイクル」などの体験コーナーがあり、障がいのある方の運動能力の高さや可能性を肌で感じる機会となりました。



ゴーグルで視覚をさえぎり、カップラーメンなどを積み上げるゲーム。なかなか思うようにいきません。

漁師町の大祭

漁師の大漁と航海安全を祈願するとともに、人々の幸せと健康を願う鹿島神社大祭が3月6日、佐賀漁港一帯で行われ、若い男女が担ぐ男みこしと女みこしが漁師町を練り歩きました。

町には至るところに大漁旗や紙垂が飾られており、太鼓と笛の音が響き渡る、いつもと違う神聖な雰囲気。みこしが近づくと、湯飲みに入れた塩水を南天の葉で振り掛け、祈りながら手を合わせる姿が見られました。

「よいーよいーよいーよいー!」。広い直線通りでは、威勢の良い掛け声を掛けながらみこしを揺らし始め、祭りは一気に勇壮なものへと変わります。歓声と拍手の中、猛然とダッシュを繰り返し、祭りを盛り上げました。



「しっかり持ちよ!!」。華やかながらも豪快な女みこし。今年も港が大漁の歡喜に包まれることを祈ります。



大きいものは縦横120cmほどもあり、出来上がるのに3カ月かかかかるそうです。



おじやみのような男びなと女びなは、参加者全員にプレゼントされました。



他にも踊りや歌、ちらし寿司の昼食会もあり、今月も楽しい時間を過ごしました。

地域で健康づくり

浮津部落では、年間の「健康づくりカレンダー」を作成し、毎月1回、町が実施している健康相談（ふれあいサロン）に合わせ、ミニ運動会やクリスマス会などのレクリエーションを行っています。3月3日の桃の節句には、婦人部によるひなまつりが浮津集落センターで開かれました。

会場に入ると、ひなまつりの音楽とともに壁一面に飾られた色とりどりのパッチワークがお出迎え。桜やおひなさまをモチーフに、婦人部のパッチワークグループ12人が作ったもので、

参加した方々は保健師による健康相談の合間、歌を歌いながらかわいらしい手作りひな壇にうっとりしている様子。「うちの婦人部は踊りを習ったりご詠歌をやったりで忙しいで。みんなが集まって、自分で考えて取り組むことがりハビリにつながる」と口々に言います。

また、婦人部リーダーの小谷美美子さんも、「ここに出てきてみんなに会い、話をする事で元気でいられる」と血圧を測りながらにっこり。「皆さん、毎月の集まりを楽しみにしてくれて、とても喜ばれる」と話してくれました。

雪がなくても雪合戦がしたい!

冬場の閑散とした砂浜を活かし一年中楽しめるスポーツで人を呼び込もうと、「ビーチ雪合戦 in 土佐入野」が3月5日、ふるさと総合センターで行われました。NPO 砂浜美術館と黒潮町雇用促進協議会からなる実行委員会の主催。



フラッグにはTシャツを使用するなど黒潮町ならではの工夫も。やってみたい方はNPO砂浜美術館(☎43-0105)まで

日本の北国で生まれた遊び「雪合戦」は近年、明確にルール化され、一つのスポーツとして日本だけでなく世界でも行われています。この「雪合戦」を、「雪がなくても雪合戦がしたい!」をコンセプトに、砂浜や室内練習用の布ボールを用いて黒潮町でもやってみようと企画されました。

当日は、町内の小学生チームから丸亀市の強豪チームまで、60人を越える方々が参加。初心者のためのルール説明や審判講習会の後、ふるさと総合センター西側に設けられた特設砂場コートで試合が行われました。

競技ルールは、1チーム選手7人（フォワード4人・バック3人）と監督1人の計8人▽試合は3分3セットマッチで、時間内に敵陣のフラッグを抜くか玉を相手チーム全員に当てた時点で勝ち▽1セットに使用できる玉は1チーム30球―など、日本雪合戦連盟により細かく定められています。

香美市から16人もの選手を率いて参加した「香美市雪合戦クラブ」は、大宮小学校の児童を主体に5年前から活動しているチームで、「玉大事に!」「前を見る。当るな!」とコーチングも本格的。チームを指導している女性は「四国でビーチ雪合戦ができるなんて感激。県内でもぜひ広めてほしい」と興奮気味に話してくれました。同実行委員会は、「ビーチ雪合戦を定着させ、砂浜を活用して楽しむ機会を増やしたい」としています。